

## 編集後記

予想を超えて長引くコロナ禍の中で令和3年が明け、一年を経た現在においてなお終息の気配が見えない。

本学では令和3年度を迎えるに当たって、長らく勤められた川瀬前学長が退任し、新たに宮永喜一副学長を新学長に迎えた。新学長からは今号の巻頭文を寄稿いただいた。多難な船出ではあったが、学長を始めとする新執行部、ならびに全教職員の多大な努力によって、まずは春・秋学期を無事に乗り切ったといったところである。

教学についていえば、講義科目のほとんどは春学期当初よりいわゆるハイフレックス式(対面・遠隔自由選択)でスタートし、一時的に全遠隔方式をはさみながら、結局は秋学期終了までハイフレックスを継続した。遠隔の利点も承知はしているものの、気になるのはどうしても学生の足が大学から遠ざかりがちなことである。

昔から「田舎の三年、京の昼寝」という。地方を軽んずるつもりはない。とは言え、一人でこつこつやるのも大事だが、学業を身につけるには人と交わる「場」が必要ではないか。学生にとってはキャンパス、教室、研究室こそが「京」ではないのか。もちろん、現代においては物理的な場に限定するわけではないだろうが、果たしてZoomの中やサイバースペースに「京」が存在するのか。既にある、いまさら何を、という声も当然聞こえてはいるが。

さて、本号のページ数は通常号としてはこれまでの最大となった。一年の延期を経て開催されたCIF21の報告に加え、地域連携センターの活動実績がこれまで以上に増加したこと、および修士論文の英文要旨数

が前号に比して倍増したとことなどが要因である。困難な状況下での奮闘に敬意を表したい。

博士後期課程中間発表、および修士論文要旨の公開は共同研究先との合意や、特許出願や今後の論文出版における先取権を考えると、難しいケースも多々あろう中、協力いただいた大学院生、指導教員に感謝を申し上げたい。また、多忙な中、論文・報告を寄せられた執筆者の皆様にも厚く御礼申し上げる次第である。

令和4年がいかなる年となるか、現時点では予測もつかない。公立大学として四年目、いってみれば完成年度ある。その成果が今後の誌面に溢れんことを祈る次第である。

(YK生)

### 編集委員

山中 明生  
大越 研人  
谷尾 宣久  
吉本 直人  
曾我 聡起  
三澤 明  
大河内 佳浩  
川辺 豊 (幹事)

### 編集庶務担当

仲俣 里美

## 公立千歳科学技術大学紀要 第3巻 第1号

令和4年3月15日発行 通巻4号

編集 公立千歳科学技術大学紀要編集委員会  
発行者 公立千歳科学技術大学  
〒066-8655 北海道千歳市美々758-65  
電話 0123-27-6014